COC「Life goes on」リプレイ

又左衛門

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

探索者たちは橘ゆずかという少女が男に絡まれているところを助けて仲良くなる。

しかし探索者を逆恨みした男による爆破事件に巻き込まれてしまう。

その爆発により探索者は四肢の一部を失ってしまうが……。

（ＢＯＯＴＨシナリオ概要より）

本稿はＣＯＣシナリオ「Ｌｉｆｅ　ｇｏｅｓ　ｏｎ」（ぱぱびっぷ様作）のセッションを元にした小説風リプレイです。

その性質上、「傀逅」のネタバレを多分に含みますので未プレイの方はご注意ください。

あちこち卓

ＫＰ：ゆづきさん

ＰＬ：うめさん（ＰＣ：神田麗）

観月さん（ＰＣ：山田花子）

又左衛門（ＰＣ：菅沼三郎）

目　次

プロローグ ―― 1
公園にて ―― 5
ショッピングモールにて ―― 12
???にて～病院にて① ―― 17
病院にて② ―― 22
病院にて③ ―― 27
病院にて④ ―― 32
病院にて⑤ ―― 37
病院にて⑥ ―― 42
???にて② ―― 46

プロローグ

これはかの年の春先、世間を一時騒然とさせたあの事件の渦中に巻き込まれた私たち3人――いや4人が共有した、ある忘れがたい経験に関する手記である。

当時のニュースを見た人間は誰しも驚いたことと思う。この爆破事件はたった一人の人間によって引き起こされたものでありながら、その動機の矮小さに反して甚大な被害をもたらした。

確かにあのパイプ爆弾による爆破そのものは、床や壁をはじめ、ショッピングウィンドウやその奥に居並ぶ商品、そして私たちの人体を、製作者の意図した通り効果的に破壊していった――彼女を傷つけることが犯人の意思であったとは思いたくないが。だが、爆破そのものよりもむしろ、その後に連なるとある事件とその幕引きの方が、より一層大きく強く、私の心に痕跡を残した。その点については私以外の二人、山田嬢と神田青年もそう感じていることと思う。

ひとつ断っておきたい。

これら一連の出来事をひとつの物語とするならば、その主人公はこの手記を記す私ではなく、先に挙げた神田青年こと神田麗に他ならない。この朴訥とした人柄の青年の不器用に抱いた恋心こそがその行動の礎となり、そして彼自身をこの物語の主人公たらしめたのである。

ただ、あの出来事をひとつの『物語』であると、まるでフィクションの出来事のように語らう事は私の不遜であるかもしれず、主人公を名指しで決めつける行いは私の独善であるかもしれない。その判断は、畢竟この手記を読む諸兄に委ねられるべきものであろう。

であれば、私は早々に物語を始めなければならない。

この物語は、木漏れ日の揺蕩う昼下がりの公園にて、私がまだ新しいフリスビーを拾うところから始まる。

ポチ、ポチ、と犬を呼ばう青年の声は、すぐに手中の玩具と結びついた。

茂みの向こうから聞こえる声の持ち主は、きっとこのフリスビーを

飼い犬が咥えて走ってくるのを待っているのだ。しかし、飼い犬は玩具を見失い、いつまで経っても現れない。そんなシーンが容易に想像出来た。

フリスビーだけでも持って行ってやろう、と茂みを掻き分けたところで、驚愕の籠った声が掛けられた。

「え……ぽ、ポチなのか？」

……確かに今の私は定職に就かぬ放浪者、ＴＰＯやドレスコードといった堅気の社会通念から離れ幾星霜、身綺麗とは言えぬ身なりかもしれぬ。かもしれぬが、初対面の人間と忠犬を見間違うとは一体どういった料簡か。

誰がポチか、と憤慨を露わにしてしかるべき場面であるが、しかし私はそれより先に目の前の青年の容姿に度肝を抜かれていた。

２ｍを上回るであろう長身。その身体に乗るのは誰の目にも明らかな異相だった。荒々しく彫刻されたような鼻筋に大きく張り出した額、まるで落ち窪んだように極端な奥目、無造作に伸ばした豊かな巻き毛は大きく日本人離れしている。だが厳つい顔つきとは裏腹に身体の線は意外なほど細く、後から気付いたことではあるが、奥目に隠れた小粒な瞳には小型の草食動物を思わせる繊細さがくりくりと宿っているのだ。

一度見たら忘れえぬ押し出しの強い容姿、そして誰よりも繊細な心を持つ神田麗と、自由人と自称することも憚られる中年放浪者である私こと菅沼三郎との、これが邂逅であった。

「いえ、ポチと違いますけど……」

言いたいことは山ほどあったのだが、あんぐりと口を開けた私にはそれだけを言うのが精一杯だった。

「あれ？　あそこにいるのはポチ……じゃないですよね？」

口を開いたのは神田の隣にいた年若い女性だった。別段隠れていたわけでもないのだが、神田の余りに人目を引く容姿に意識が囚われていた為か、彼女の発する声を聞いてようやくその存在に気付く事ができた。

読者諸兄におかれては最早明らかな事と思うが、彼女が山田花子そ

の人である。
　女性にしてははっきりとした顎と眉のラインが意志の強さを表すかのよう、ゆったりとしたランニングウェアに身を包んでおり身体の線ははっきりとしないが、身体を鍛えた者に特有の動きの機敏さが、その所作の端々に現れている。
　彼女の視線を追うと、確かに人懐こそうな大型犬が尻尾を振ってこちらを見ている。我々と目が合うと、軽くひと鳴きしてこちらに小走りに走ってくるではないか。恐らく純血のゴールデンレトリバーであろう。首輪を付けていることから飼い犬であると思われたが、リードは付けられていない。堂々たる体躯を柔らかな黄金色の長毛に包み、ヘッヘッと吐息と共に舌を垂らしたその表情は眩しいほど純粋な好奇心と好意を湛えていた。簡素ながら気品ある金属装飾を施した、純白の首輪が眩しい。愛くるしさを辺りに振りまくように、そのままレトリバーは我々３人それぞれの周りをグルグルと回りだした。
「めっちゃ懐いてるみたいですけど、この子がポチじゃないんですか？」
「いえ、うちのは柴犬でして……」
　このように台詞だけ抜き出すとまるで面と向かって会話しているようであるが、その実、私はレトリバーを追い回しながらの会話である。これがまた楽しいのだ。小走りに追いかけてやると、いっそうスピードを上げて駆け出し、それでいて私たちの周りから遠くへ離れることはない。口角を更に上げたような表情で、長い舌をたなびかせて疾走するその様は、私の心を甘くかき乱し止むことはなかった。
「いや、可愛いですねえ」
　ひとしきり追い掛け回した後、背を丸めて荒い息を忙しなく吐き出しながら、言い訳のようにそう口にした私を、二人は呆れ顔で見つめている。さもありなん。しかし、思いがけない闖入者（犬）が、奇妙な二人組との距離を縮めてくれたように感じる。そう感じるのは私だけかもしれないが。
「でも段々遠くへ行っちゃうみたい」と山田嬢。
「あ、でも止まってこっち見てる。誘ってるのかな？」

神田青年の言う様に、少し距離を置き首だけを向けてこちらを見つめる様は、何処かに誘っているようにも見えた。
「……一緒に行ってみますか？」
そっちに、ポチがいるのかも。およそ何の根拠もない当て推量、単なる思い付きだったが、恐る恐る提案した私に、２人はそれぞれの態度で頷いた。山田嬢は竹を縦にパカリと割ったような小気味良い返事を、そして神田青年は一泊遅れておずおずとどもるような返事を。
いみじくも彼の言葉は正鵠を射ていた。レトリバーはまさしく我々を何処かへと導いていた。先導し、我々の歩調に合わせ、そして時折振り返るのだった。まるで先導役として、ちゃんと着いてきているか、とでも問うように。
それは字義通りの先導であり、我々が共有する物語への導きでもあったのだ、と今になって思う。

公園にて

歩を揃えて歩きながら、私はこの同行者たちに興味を惹かれていた。不思議なことに、背格好はバラバラな3人なのに、歩く速度は皆殆ど同じなのだった。山田嬢の体幹の揺ぎ無き事は背筋に青竹を添わせているかの如く、その身長からは思いがけず腕の振りと歩調は速い。一方神田青年は長身の者に特有の猫背で、とぼとぼと歩く様に覇気は全く感じられなかった。

ようやくともいうべきか、歩きながらめいめいが軽く自己紹介をした。

山田嬢は警察官と見た目通り、神田はアニマルセラピストという一風変わった職業である。その口ぶりから察するに職場関係で何か悩みを抱えているようだが、初対面でそこまで踏み込むのはどうにも憚られた。

「そういう菅沼さんは、何をなさっているんですか?」

「大学を出てからずっと議員秘書をやってたんだけど、ちょっと前に辞めちゃって、今はただの旅人だね」

旅人、とオブラートに包むような表現になったのは心中最後に残った見栄のなせる業である。真の世捨て人になるにはまだまだ未熟であると言わざるを得ない。ただ、旅をしているのは本当の事で、つい先日幾度目かになるお遍路巡りを終えて、さあ次はどこに行こうかしらと麗らかな午後をこの公園で満喫しながら思案していた次第なのである。

「ああ、お二人は知り合いなんですね」

「知り合いと言っても、挨拶するぐらいですよ。私はジョギング、神田さんはワンちゃんのお散歩をされてて、よくこの辺りですれ違うんです」

「お互いの名前も、今、ようやく、知ったところです」

神田は少し初対面の緊張が解れてきたのか、吃音こそ消えたものの、一語いちご区切るように訥々と語った。これが彼本来の喋り方らしい。

レトリバーが我々を何処に誘っているのか、答えは程なく明らかになった。
それは飼い主と思しき一人の少女の元。歳の頃は１０代の半ばで、遠目にもそれと分かる可憐な佇まい、しかしその時は両の腕を胸の前で掻き抱いて、もう一人の人物から身を遠ざけようとしているように見えた。
近づいてみると、もう一人の人物は小太りの眼鏡を掛けた年齢不詳の男で、どうやら何かを少女に渡そうとしているようだった。近づくにつれ、二人の会話から彼らの関係と成り行きをおぼろげながら察することができた。
「困ります。知らない人から物を貰うなんて、出来な……」
「僕は君の事を知ってるよ、あの時声を掛けてくれたじゃないか」
少女は本当に怯え困っているような口ぶりだが、育ちが良いのか生来の性格か、どこかその口調はおっとりと間延びをしたようで、はっきりとした拒絶を態度に表すことが出来ていない。そこに付け入る隙があると見たのか、男はしきりに距離を詰め、彼自身の言葉によれば時計――腕時計だろうか、小ぶりな包装だ――の包みを渡そうとしていた。その口角からは泡を飛ばさんばかり、妙に芝居の掛かったような早口で、少女の拒絶を遮っては自分の言いたいことだけをまくし立てている。
犬はもう一度こちらを振り返り、「な？」とでも言いたげな表情だ。飼い主同様育ちが良いのか、彼女が明確な拒絶の意思を示している訳でも、危害を加えられている訳でもないから男を害する事ができず、仕方なしに他の人間に助けを求めたというところだろう。優しく、賢い忠犬ぶりが重ねて私の心を打った。
それにしても、問題はこの男の態度である。自分の要求だけをひたすら喋り、少女のいう事に耳も貸さなければ、周囲にいる我々の事を気にかけている風でもない。有り体に言って、尋常な様子ではない。
もし今ここにいるのが２０年前の私で、この目の前の男が私の後輩であれば躊躇なくどやしつけ、「ナンパの手本を見せてやる」と嘯いて夜の街に連れ回したことだろう。だが今の私はくたびれた中年男、あ

の頃の血気盛んさはとうに失われてしまったし、暴力沙汰も怖い。それでも年長者としての矜持から、何か言いたげな山田嬢を目顔で制して問いかけた。
「あの、お二人はお知り合いですか?」と我ながら何とも腰の引けた問いだったが、男は真っ赤な顔で振り返って叫んだ。
「知り合いだから!おっさんには関係ないから!」
「知らない人です……」
「だから僕は知ってるって!」
少女は殆ど半べそをかいて、ようやく助けが来たとばかり、こちらに縋るような眼差しを向けている。それに対して男は更に感情を昂らせ、とてもではないが話し合いのできる精神状態にあるとは思えなかった。だが今更、私の方も後に引くことはできない。
「そちらのお嬢さん、嫌がってますけども」
そう言った途端、男は我慢の限界を迎えたのか、何事かを叫びながら飛び掛かってきた。
その反応は予想できないでもなかったが、年齢なりに錆びついた反射神経は突然の暴力の前に何の反応もできず、私は突き飛ばされて無様に地面に転がった。
「ちょっと!」
突き飛ばされ声も出ない私に比べ、山田嬢は勇敢だった。もちろん職業柄ということもあっただろうが、語気も鋭く咎めながら躊躇いなく歩を踏み出し、男を組み伏せて確保せんとする構え。
しかし電光石火の反応を見せたのはむしろ小太りの男だった。多勢に無勢とみたか、それとも少しでも強そうな素振りを見せる人間には立ち向かう気概がないのか、足をもつれさせながら、それでも山田嬢の踏み込みを上回る速度の逃げ足で退散していった。
青色吐息に叫んでいたのは覚えてろよ、という捨て台詞だったのかもしれない。
「あの」とおずおず声を掛けられ我に返ると、少女が大きな瞳を潤ませながら頭を下げていた。神田のくせ毛とはまた違う、軽やかにカールした髪がふわりと揺れる。

「ありがとうございます。ムサシのお散歩をしていたら……急にさっきのおじさんが話し掛けてきて……」
しゃくりあげ、感情の乱れも収まらぬまま喋るものだから所々要領を得ない部分もあったが、彼女の名前が橘ゆずかということ、まだ中学生だということ、ほど近くに邸宅があること、先ほどの男とは面識のないこと（少なくとも彼女にとっては）は知ることが出来た。ムサシと呼ばれたレトリバー犬は彼女の足元に畏まって座り、心配そうな面持ちで主人を見上げている。
「橘って、あの豪邸……ですよね。いい所のお嬢さんですよ、この子」
耳打ちというより、真上から呟きかけるような格好で神田青年が低く囁くが、この辺りに不案内な私は勿論、山田嬢もあまりピンとは来ていないようだった。
「もし良かったら、皆さんのお名前と、連絡先を教えてくださいませんか？」
ひとしきり話して興奮も落ち着いたのだろう、すみません私だけ喋り通しで、と恥じ入る様子を見せながらも、少女は私たちに名乗りを請うた。その態度と言い、言葉遣いと言い、確かに世間一般の中学生とは思えない。神田青年が指摘した通り、上流階級としての教育をしっかりと受けてきた箱入りの子女なのであろう。
そして、一年草の花つぼみを思わせる、可憐で儚げな少女に名乗りを請われ否と言える人間はいない。山田嬢は慌ててスマートフォンを取り出し、神田青年に至っては卑屈に媚びるような笑顔で、「神田です。名前は麗です。神様の田んぼに麗しい、って書きます」と息せき切って我先にと名乗りを上げている。
「私は山田花子って言います。今日はお休みだけど、警察で働いてます」
はいこれ連絡先。ＱＲコードでいいかな？　と手中のスマートフォンを差し出す山田嬢。
「ええ、構いません」
「あ、ぼ、僕はアニマルセラピスト、です。えっと、アニマルセラピストっていうのは動物と一緒に、……」とつっかえながら不器用に話す

神田青年に、微笑み相槌を絶やさず行儀よく耳を傾ける少女。真っすぐ神田青年を見上げて逸らされない彼女の視線に対比するかの如く、長身の神田青年は視線をさらに低く保ち、最早自分の足元に蟻の行列を探すかのよう。

紆余曲折を経た話がひと段落したところで、少女の瞳がくりっとこちらに向けられた。

「ああ、菅沼です。菅沼三郎」

仕方ないな、という態度を示すのが精一杯の虚勢のつもりであったが、後々山田嬢には「嘘でしょってぐらいめっちゃヤニ下がってましたよ」とからかわれたものだ。認めよう、その通りである。

しかし名乗りを躊躇っていたのには他にも理由があった。ハイテク機器と縁遠き根無し草たる私は、交換すべき連絡先を持ち合わせていないのだ。スマートフォンなど勿論持っていない。加えて、それがどんな外観をしているか知っているものの、それと携帯電話がどう違うのかの区別もつかない有様だ。

「いやあ、携帯は持ってないんだよ」

「そうでしたか。菅沼さんは、お仕事は何をされているんですか？」

子どもは残酷である。察しが悪い。

「人間、どんな仕事をしているかなんて、重要じゃないんだ」

「？　そうですね」

察しは極めて悪いが、良い子である。心根の素直さによるものか、噛んで含めるような私の言葉にそれ以上疑問を呈することは無かった。

「これで私たち、友達ですね」

スカートの裾を軽やかに翻し、私たち3人を振り返りながら、目を細めて満面に笑みを浮かべる少女。花が咲いたようだ、と月並みな感想が脳裏に上った。

さて、その橘嬢であるが、先ほどの物怖じしない態度が嘘のようにモジモジと俯いている。

「あの、皆さん……突然で、大変不躾なのですが……今からのご予定は、おありですか……？」

消え入りそうな声で呟く彼女を前に、我々は顔を見合わせた。
「いや、特にはないよ」
真っ先に答えたのは当然ながら私である。憚りながら、この場にいる誰よりも暇である自負も自信がある。だが、予定がないのは他の二人も同様であったようで、めいめい否定の言葉を返した。
「あれ？　そういえばポチは大丈夫なんですか？」
「あ、さっき、職場から連絡がありました。独りで、戻ってたそうです」
苦り顔の神田青年は、同僚とのやりとりを思い出しているのか。嫌味の一つも言われたのだろうか。職場での悩み事というのは、案外人間関係なのかもしれないなと私は考えた。
それは悪く言えば世間知らず、良く言えば微笑ましいお願いでだった。
蝶よ花よと大切に育てられたに違いない目の前のお嬢様は、新しい友人たちと、近所のショッピングモールに連れ立って行ってみたいというのだ。
「私、その……行ったことなくて……」
これには私たち3人ともが吹き出してしまった。少女は恥ずかしそうに赤面しきり、ムサシは何事かときょきょろと4人の顔を順繰りに見やっている。
勿論、断るつもりはなかった。
家の者を呼びますので、と少女はスマートフォンを操作し、程なくやって来たのは角刈りの青年だった。ペコリと折り目正しくお辞儀をする若い衆に、少女は「ムサシをお願いね」とリードを手渡し、犬も素直に従って若者の方に歩を進めた。
「では、行きましょう！」
私もこの辺りは土地勘がないので知らなかったのだが、ショッピングモールはここからほど近い所にあるらしい。
徒歩で向かう道すがら、少女は年頃らしくその表情をくるくると変えて上機嫌だ。
「ねえ、目当ての店はあるの？」と山田嬢。
「いえ、特には……」

いっぱいお店があるんですよね、どの店が良いでしょう、とおとがいに指先を当てがって思案顔の橘嬢である。そこに思いがけず、神田青年が気の利いた助け舟を出した。

「ペットショップ、はどうですか？　ムサシにおやつを買って帰れば、きっと、喜びますよ」

それはいいですね、と少女は目を輝かせる。

ショッピングモールは地方都市に見られるタイプの2階建てで、食品や服飾品売り場をはじめ様々な専門店がその中に間口を連ねている。その中でもペットショップは1階の隅にあり、まずはそちらで大型犬向けのおやつを買ってから他の店舗を冷やかす、という運びとなった。

ショッピングモールにて

ペットショップに着くや、神田青年は颯爽とカウンターに向かっていった。仕事柄よくこの店には顔を出すらしく、馴染みの店員にお勧め商品を教えて貰おうというのだ。二人の会話を橘嬢が真面目腐った顔でふんふんと頷きながら聞いているのが何とも可笑しかった。

「うっわ可愛い」

山田嬢がアクリル板ごしに子猫の寝姿をみて興奮している。

「嘘だろ……犬が鹿肉のジャーキー食うのか……」

これは私である。犬が自分よりも上等な食事をしているという事実は、心にくるものがある。

ペットショップでの買い物が終わると、次は2階のスポーツ用品店に足を運んだ。犬の散歩ならもっと歩きやすい靴にした方がいい、という山田嬢からのアドバイスによるものだ。確かに、少女の履くローファーは、長距離かつ長時間の歩行に向いているとは言い難い。

「私のイチ押しは、ここのメーカーですかね」

機能性とデザインの両立、というテーマで山田嬢が選び出した商品に、疑いを差し挟む事無く「それにします！」と飛びつく少女。

「いや……一応試し履きしたほうがいいよ……」と窘める山田嬢。

「あ、これ、凄く歩きやすい」

僕もこれ買おうかな、と神田青年。

私も試し履きをしてみたのだが、確かにお勧めというだけあって足にしっくりと馴染み、クッション性も高い。矯めつ眇めつするも作りに粗はなく、また中庸なデザインは服装を選ばない。年間歩きとおし、ウォーキングシューズに人一倍五月蠅い私の眼から見ても、なかなか魅力的な商品である。

結局、サイズとカラーリングは違えど、皆が同じ商品を買う事になった。

立花嬢は「みんなお揃いですね！」と興奮を隠せない様子。

「実はね、私も新しい靴を買おうと思ってたんですよ」と山田嬢は誰にともなく言い訳しながら照れている。

神田青年は見ていられないぐらいの舞い上がりようだが、かくいう私も似たようなものである。
「あそこ行ってみたいです」と次に少女が指さした一角は所謂ゲームセンターであった。派手な電飾を散らしたメダルゲームや、デコ云々といった謳い文句を筐体に散りばめたプリクラ、クレーンゲームに昔懐かしいビデオゲームが店内を埋め尽くし、それぞれが衆人の注目を促さんと様々な効果音や音楽で自己を主張し、負けじと店内ＢＧＭが音を張り上げる。
こういった店に免疫がないのだろう、耳目を混沌に揺さぶられた神田青年は目を白黒させていた。
「ストⅡはないのか……」と己が青春時代を象徴するタイトルが無いことに肩を落とす私。
女性陣二人は、これまた懐かしのぷよぷよで対戦していた。どちらも一目見て初心者と分かる拙い操作だが、軍配は微差で橘嬢に上がった。脇を締めて小さくガッツポーズをとる少女に、本気で悔しそうな渋面を作る山田嬢。それを見て「微笑ましいね」と呟く私は、傍から見ればさながら親戚のおじさんのように映ったかもしれない。
因みに私は神田青年と対戦したのだが、大連鎖の嵐に惨敗を喫している。
「神田君、やったことないって嘘でしょ……」
「本当、ですよ。連鎖させるだけなら、簡単です」
コツさえ分かれば、と得意顔である。
ゲームセンターを出る間際、「撮りませんか？」と神田青年の手を引いたのは言うまでも無く橘嬢で、引いた先は出入り口付近に鎮座するプリクラの筐体である。ゲームセンターに足を踏み入れる際に目を付けていたとみえる。みっともなく赤面し、手を引かれるままよろめき歩く神田青年の後ろを、私と山田嬢が冷やかすように着いていく。
数分を要し試行錯誤の末出来上がったのは、戯画的な星やハートマークがそこかしこに、しかしどこかぎこちなく散りばめられた一枚の写真群である。それを人数分に切り分け、それぞれが今日の記念にと大切にしまった。

勿論私も、今に至るまで大切に保管してある。もう見返すことも余りないのだが、それを見るときは決まって、ある種の後悔や感傷が胸の内をざわめかせる。

写真に写る４人の顔は、どれも心から楽しげに笑っている。

すぐ後に起こる災禍の、その予兆はどこにもない。

驚くべきことに、橘嬢はハンバーガーを食べたことが無いと言う。

ちょうど時刻も小腹の空く頃合い、フードコートの一角に掲げられるは燦然と輝くＭの一文字。となれば、やるべきことは一つである。

「僕はビッグマックのセットを。ドリンクはコーラ、ゼロじゃない方で」

「ええと、フォレオフィッシュを、ひとつ下さい」

「あまり沢山食べてしまうと晩御飯が……あ、このハッピーセットって何でしょう？」

きょろきょろと視線の定まらない少女と、心もち腰をかがめ懇切丁寧に説明する山田嬢の姿は、最早歳の離れた仲睦まじい姉妹のよう。絵になる風景とはこの事だ。

空いたボックス席を探す折に、山田嬢が「かわいらしい子ですよね」と耳打ちのように、しかし声に笑みを乗せて囁いたが、貴方もですよ、と思わずにはいられない。

座席を探していたからこそ、その男の存在が目についた。

濃い色のサングラスを掛け、黒い上下の装い。さりげない風で席を立ち歩き出したが、ちょっとした小包程度の紙袋を椅子の脇に置き去りにしている。

「お忘れ物ですよ」と気づいた少女が声を掛けるも、男は気付いた素振りもなく歩き去っていく。

「忘れ物ですよ！」

私もその後ろから声を張り上げるが、男は委細構わず、ついに駆け出してその姿を消した。

「行ってしまわれましたね……」

この荷物どうしましょう、と紙袋に歩み寄る少女。

そのお人よしが彼女の災いとなり、文字通りの命取りとなった。

私も訝しむ思いはあったものの、何かに感付いて咄嗟の行動を取るには、長い年月を平和に過ごしすぎた。

閃光。

轟音。

それらが同時に我々を襲った。

後の報道により、それはパイプ爆弾と呼ばれる兵器であると知れた。破壊と殺傷を至上の命題として金属パイプの内部にパチンコ玉や鉄釘を多数内蔵された、犯人お手製の爆弾である。

爆発の勢いそのままに爆散する鉄片が、周囲の全てを傷つけ苛んだ。それは私たちの身体も例外ではなかった。

爆発の後の出来事を記すのは、容易ではない。

衝撃と肉体へのダメージにより記憶の曖昧な部分もある。だがそれ以上に、年端も行かぬ少女の、私たちを新しい友人と呼んでくれた彼女の、その悲惨な最後をつまびらかにすることは私にとって余りに苦しく、難しい。

大要だけを書こう。

爆発に最も近かった彼女の身体からは、その下半身が完全に失われていた。

それに気づいた私は慌てて駆け寄ろうとしたが、足が萎えたように動かない。見ると、私の両膝から下も、まったく原型を留めておらず、すり潰されたようになっていた。

うめき声を上げながらしきりに「痛い、腕が、どうして」と繰り返していたのは私の後ろにいた神田青年で、その左手は肩口から先が無い。双眸は虚ろ、恐慌状態にあることは一目で分かった。神田青年のほど近くで山田嬢がうつ伏せに倒れており、その左足は皮一枚で何とか繋がっているような有様だった。

だがそれよりも少女を、と私は爆心地に向かって這いずっていった。神田青年だけではない、私も確かに正気を失っていたのだろう。出血のせいか、痛みは殆ど感じなかった。

どれだけの時間を掛けたのか、彼女の傍に辿り着き、その身体に縋りつくようにして名前を読んだとき、あろうことか彼女にはまだ意識

があった。薄っすらと開けた瞳は濁り、それでも私の姿を辛うじて捉えたのか、殆ど色の失われた唇から懸命に、絞り出すように呟いた。
「私の身体……どうなっていますか……？」
爆発に苛まれた私の耳だが、聞こえるかどうかの微かな声を一言も聞き逃すまいと、必死で耳をそばだてた。
「……きっと助かる……もう、喋らない方がいい……」
「死んじゃうのかな、私……」
私の空々しい励ましも、彼女に聞こえている風はなかった。
「他の皆さんは……ご無事ですか……」
「……大丈夫だよ、それよりも君が……」
「私……死にたくない……けど、もう……駄目みたい……皆さんは……」
生きて、と声にならない言葉を最後にして、少女は逝った。
私の記憶も、そこで途切れている。

???にて～病院にて①

夢を見ていた。

夢もその印象の強さによっては永く人の記憶に残る事は稀あるが、これもそういった種類の、飛び切りに奇妙な夢だった。

夢の中で、私は仰向けに倒れていた。

天井が高すぎるのか、照明が暗いのか、眼前には薄らぼんやりとした闇が広がるのみ。ここが何処であるか確かめようにも、身体を起こすことは出来なかった。そればかりか、頭も、視線すらも、私の意志と切り離されたように動かない。声も上げられない。ただ、背面や後頭部に当たる固く湿った質感から、じめじめした地面に寝かされていることが知れるばかりだ。

声が聞こえる。何を言っているかは分からないが、それは橘嬢の声であると知れる。

ふと、目の前を何かが、ゆっくりと横切った。

眼球すら動かず、目を凝らすことも適わぬが、動きの緩慢さから、やがてそれが何であるかが分かった。

赤とも紫ともつかぬ毒々しい体色に薄色の大きな斑点を散らし、差し渡しが３ｍにも及ぶのではないかという、それは巨大な芋虫であった。身体の機能と同じく、精神も麻痺しているのか、おぞましい筈のその姿を見ても、不思議と恐怖や不快感は湧きあがらない。

柔らかな質感の体躯を細かく捩るように蠢かせて這いずり、芋虫は私の脚の方に向かってきた。

やがて歩を止め、何かを咀嚼するような音が辺りに響き渡るのだった。

痛みは無いが、きっとそれは私の両の膝下を食べているのだ。

ややあって、両脚を平らげたと思しき芋虫は再び動き始め、程なく視界から消えた。

しばらくして、また咀嚼音が始まる。途切れることなく聞こえていた橘嬢のあえかな声が、苦痛の混じったうめき声、泣き声に変わっていく。何を言っているのかは、やはり分からない。

肉を食む音が途切れ、芋虫がまた戻ってくる。私の顔を覗き込んだ。
そこに目はなく、口吻もない。まるで人の口蓋から唇を剥ぎ取ったような剥き出しの、エナメル質の歯が並んでいた。
体表に散る薄色の大柄な斑点かと見えたそれは、それらは、全てが私の顔であった。

がばりと身体を起こした。
硬いベッドに、白く清潔なシーツ。ベッドの周りをカーテンが手狭に区切っている。
鼻につくのは、独特の薬品じみた匂い。
ここは……病院だろうか？
大きくシーツを剥ぎ取り――私は、自分の膝から下が当たり前のようにそこにある事に気付いた。触ってみれば確かにそこにある。感覚もあるし、動かすことも出来る。そして、傷一つ見当たらない。
確かに、あの爆発で失われた筈だ。この世に有り得べからざる怪物に食い千切られた両脚――いや、あれは夢だ。であればショッピングモールでの出来事も、公園での出会いも全て夢ということか――？
寝起きばなの思考は千々に乱れ、定まらない。
ふと、カーテンの向こうに人の気配を感じた。薄布に映る影も朧だが、２人の人間が抑えた声で話ながら、こちらの様子をカーテン越しに覗っているようだ。ベッドから半身を乗り出してカーテンを引き開けると、果たしてそこにいたのは神田青年と山田嬢であった。二人とも、簡素な袷の病院着を身に纏っている――遅まきながら、私も同じ服装でることに気付いた。
２人ともが、涙ぐまんばかりに安堵の表情を浮かべていた。
「良かった、気が付かれたんですね」
「僕も、ついさっき、目が覚めたところで……そっちのベッドです」と向かいのベッドを手で示す神田青年。
話を聞くに、ここはワタリクリニックという病院の一室で、意識を失ったまま運び込まれた我々は、治療もそこそこにこの部屋に放り込

まれたという事らしい。勿論山田嬢は別室であったが、我々の中では一番に意識を取り戻し、この病室に駆けつけたところで目を覚ました神田青年と合流して、残った一人である私の様子を覗おうとしていたようだ。

だが、我々が病院にいるということは即ち……

「夢じゃなかったんだな……」

夢、という単語に二人は何とも言えない表情をして視線を交わしあったが。

「……菅沼さん、お身体は何ともありませんか？」

何か含みを持たせるような口調で山田嬢が問う。視線は未だ半ばシーツに隠れている私の脚に注がれている。それが意味するところは明白だ。

「……何ともない。君らもそうみたいだね」

「やはり、菅沼さんも、おかしいと思われますか？　その……僕たちの怪我の事ですが」

ずばりと切り込んだのは神田青年である。

思い返してみれば、彼らも手足を失う大怪我を負っていたはずだ。しかし、目の前にいる二人はぴんぴんしており、私の身体同様、ガーゼや包帯などの治療の跡すらない。私は、何か記憶違いをしているのだろうか？

混乱を隠せない私に、神田青年はまたも核心に迫る言葉を掛けた。

「菅沼さんが仰っているのは、あれだけの爆発事故が起きたというのに、僕たちは怪我一つ負っているようには見えない、ということですよね。僕たちも、ちょうどそれを、話し合っていました」

僕たちの手足は、確かにあの時失われたはずだ、と神田青年。山田嬢もしかりと頷く。

どうやら、我々3人ともが皆、生死に関わる大怪我を負ったという記憶はあるようだ。だが、現実はそうではない。これは真に奇妙な話であるように思われた。

「ああ、皆さん目を覚まされましたか」

そう言って手慣れた足取りで入室してきたのは、綺麗な銀髪を上品

に撫で付けた、壮年の男性医師であった。
「初めまして。当院の院長を務めております、渡といいます」
回診かと思ったのか、気を利かせて退室する素振りをみせた山田嬢を、「大した話ではありませんから、皆さんでお聞きくださって結構ですよ」と渡医師はやんわりと制した。病室に我々しかいなことは院長の彼にとっては周知の事実であろう。入室した時の後ろ手のまま、その場で話を始めた。
「皆さん、今回は大変な事故に巻き込まれましたね。ただ、あれだけの事故に関わらず、殆どお怪我をされなかったのは幸運でした」
しかし、もう一人の方は……と続くところで、神田青年が勢い込んで「ゆずかさんの容態はどうなんですか」と食って掛かった。話の腰を折られた形だが、渡医師は気を悪くした様子もなく、穏やかな口調のまま続けた。
「橘ゆずかさんですが、残念ながら、当院に運び込まれた時には既に手遅れでした。手は尽くしたのですが……残念です」
目の前が暗くなる思いだった。記憶と違って我々が傷一つないのだから、彼女ももしかしたら、と私も心の何処かで期待していたのは確かだが、そんな淡い期待はあっさりと裏切られた。
うああ、とうめき声を上げたのは神田青年だ。その場に膝をついてへたり込んでいる。先ほどまで見せていた、情報を共有し事実を明らかにせんという意気込みは、橘嬢が我々の記憶に反して無事であってほしいという気持ちと表裏一体のものだったのだろう。しかしそれは他ならぬ臨終を看取った渡医師の残酷な死亡宣告により、あっさりと崩れ落ちてしまった。
介抱するように山田嬢がそっと立たせ、ベッドの縁に腰を下させた。神田青年は大粒の涙を隠すように顔を伏せ、声を殺し呻くように泣き出した。
翻って、山田嬢は冷静であった。
「先生、ゆずかさんは、その……ここに運び込まれた時、どのような容態でしたか？」
不意を突かれるような思いだった。確かに、私たちの負傷が共通の

記憶からかけ離れている以上、橘嬢のそれもまた、私たちの記憶にある物――下半身を吹き飛ばされはずの致命傷とは違うのでは、と彼女は疑っているのだ。
　果たして、この問いには渡医師も言葉を濁した。
　だが、続く言葉は我々を鼻白ませるには充分だった。
「とても酷い有様でした。ご遺体はまだ、霊安室に安置されています。お勧めはしませんが……ご対面なさいますか？」
　大切なご友人だったのでしょう、とあくまで気遣う口調の渡医師に、しかし頷きを返す勇気は私には無かった。神田青年はいよいよ布団を頭から被ってしまった。
「皆さんは幸運にも、あれだけの事故に関わらずご無事に生還されました。それは、橘さんの身体が盾となったからです。そうしようと意図した訳ではないかもしれませんが、皆さんは橘さんに助けられたとも言えます。どうか、助けられた命を大事になさってください」
　お怪我はないようですが爆発のショックで丸1日寝込まれていたのですから、一通りの検査は受けて下さいね、と言い残して、渡医師は退室した。
　神田青年の嗚咽が、いつまでも続いていた。

病院にて②

問診やＭＲＩをはじめとした検査を終えたところで「気分転換にロビーにでも行きませんか」と提案したのは山田嬢だった。

中身を失った抜け殻のように諾々と、言葉なく検査を受ける神田青年を見ていられなかったのだろう。

「そうだね……そう言えば、二人とも職場や家族に連絡はしなくていいの？」

「あ……」

「そうだ、ポチに餌やったか聞かなきゃ」とさすがに神田青年ものろのろと動き出した。

「僕は携帯を持ってないから、お先にロビーに行くよ。そこに公衆電話もあるだろうし」

「いやあ、めっちゃ質問攻めにされましたよ」

「僕も実家に掛けたら母親が出たんだけど、それはもう凄かった。何せあれだからね」

ロビーにて、頭を掻き掻きやってきた山田嬢に向かって、テレビ画面を指し示してやる。

画面に映るのはニュースの特番で、ショッピングモール爆破事件のあらまし、使用された爆弾、犯人像に犯行の背景、その他云々……と専門家やコメンテータが長々と解説している。ゲストのタレントが勝手な憶測や感想を述べるや、映像は生々しく破壊の痕が残る現場の様子に変わり、テレビの中の熱狂は果てることなく続いていた。

犯人。そう、この惨状を作り出した犯人は既に確保されていた。

秋葉原某というその名は、読者諸兄には既知のものであろうと思うし、その正体も予想は付いている事だろう。爆破後の不審な挙動からほぼ現行犯で捕まったその男こそ、昼下がりの公園で橘嬢にしつこく絡むことしきり、山田嬢に撃退された、あの小太りの不審者だった。

犯行の動機は、「邪魔者を消したかったから」だという。

「あの時、きっちり捕まえておくべきでした……」

心底からの後悔と罪悪感に、山田嬢は身を震わせていた。だが、あ

の時の彼女の行動には称賛こそあれ、詰られるべき何かがあったとは思わない。誰がこのような結果を予想できるだろうか。
「こいつが、ゆずかさんを……殺してやる……」
地の底から這い出るような声色で呟くのは、いつの間にかロビーに到着していた神田青年だった。幽鬼さながらの居姿と、奥目に暗く燃える憎しみが凄みを感じさせた。
殺す、という剣呑な言葉に山田嬢は一瞬咎めるような視線を向けたが、それはすぐに痛ましいものを見るような憐みの表情に変わった。
共にした時間は短かったとはいえ、彼が橘嬢に抱いた恋心は言葉にするまでもなく明らかだったからだ。
ふと、画面内の狂騒以外にも、辺りを騒がせている声があるのに気づいた。
ロビーにほど近い、受付の方からそれは聞こえた。
「お話だけでもいいんです」となにかをせがむ若い男と、あくまで穏便にだがはっきりと拒絶の返答を返す受付嬢の声である。
病院に似つかわしくない騒ぎを胡乱げに見やる我々の視線に思うところがあったのか、今の今まで執着していた受付嬢の前をあっさりと辞して、こちらへ向かって軽やかに歩を進めてくる。
困惑の声で制止する受付嬢に振り返り、「大丈夫！　大人しくしています。お話を聞くだけですから」と（何が大丈夫なのか分からないが）手にしたペンで念を押すかのような仕草だ。
「お騒がせして済みません。私、こういう者でして」
差し出しされた名刺には、「アトランチック平和堂出版　月間無有編集部　ライター」という肩書の下に「真矢文明」とあった。名の方はブンメイではなくフミアキと読むようだ。
聞いたこともない出版社だな、と私は訝しんだ。
細身の長身に白いワイシャツ、シンプルな柄のネクタイ、糊の効いたスラックスを着用し、短く刈った黒髪は所謂若手のビジネスマンスタイル。加えて切れ長の瞳が鋭角に整った容貌を引き立て、随分なハンサム振りである。にも関わらず、大仰な身振り口ぶりと軽薄な態度が第一印象を台無しにしている事に、彼自身気付いているのかどう

か。
「うさん臭い名前だ……」と神田青年がささやき声で呟いた。
「記者さんですか」と興味深げに返す山田嬢に「良ければ一冊どうぞ」と真矢青年が真新しい雑誌を手渡した。表紙には大きく「月間無有」とある。発売日からして最新号なのだろう。その場でパラパラめくる山田嬢。後ろから私も記事の見出しをチェックする程度に読んでみると、
『ＵＦＯの発着場か？　南極に巨大ピラミッドを発見!!』
『富士の樹海に地底世界への入口が？　地底人と本社記者が接触！』
『九州の自身は中国の地震兵器の仕業？　科学的に検証する』
といった見出しがズラズラと並んでいた。
肩越しに、山田嬢の顔が引きつるのが分かった。私も多分同じ顔をしていたと思う。
「あ、そちらのお二方も如何ですか？」
私は丁寧に固辞し、黙って受け取った神田青年はそのまま病院のマガジンラックに突っ込んだ。真矢青年は気にした様子もなく、あまつさえ「実は私、調べ物をしていまして」としゃあしゃあと話を続ける始末である。我々のような反応には慣れっこなのか、それとも驚くべき精神の頑強さによるものか、いずれにせよこういった精神性の持ち主でなければ世の中の陰謀論をかき集めたようなトンデモ本の編集者は務まらぬのであろう。
「こんなロビーの中央では何ですから、こちらへ……」
今お話よろしいですか、の一言もなくロビーの隅へ連れて行かれ、場はすっかり彼のペースである。とはいえ、検査入院中で暇を持て余す身である、消極的ながらも話に付き合う流れになってしまった。
「皆さん、ドクター渡の陰謀をご存知ですか？」
声を潜めて語り出したのは、予想通り荒唐無稽な話であった。
曰く、この病院は宇宙人の秘密実験場で、渡医師は宇宙人である。
曰く、渡医師は地下でアンデッドの軍隊を編成し国家転覆を目論んでいる。
曰く、このような陰謀は阻止しなければならない。

「間違いないんです」と語気を強めるトンデモ記者に「あの……何か根拠はあるんですか？」とおずおず尋ねる山田嬢。
真面目か、と私は思った。どこで話を切り上げるか思案すべき場面で、相手の話を促してどうするつもりか。そんなことを言えば……
「よくぞ聞いてくれました！」こうなるに決まっているのだ。
得たり、と声のトーンを1段上げる真矢記者。万年筆とノートを取り出し、身体を心持ち横に傾けペン先を山田嬢に向けて、興奮した時の癖だろうか、上下に振っている。
「僕はこの病院について、いくつかの情報を掴んでいるんです。その情報の指し示す意味を考えると、必然的にその結論になるんですよ」
ノートをペラペラと捲りながら、我々を万年筆で指しながら得意げな顔で『掴んだ情報』とやらを教えてくれた。
曰く、霊安室から死んだ人の泣き声が聞こえるという噂があり、ここからアンデッドを作り出しているという事が推察できる。
曰く、このクリニックは難病の治癒率が高すぎることから、人間の常識を超えた超科学技術が使われている事に疑いの余地はない。
曰く、渡医師が霊安室から消えて病院内にテレポートしてるという複数の証言があり、彼が宇宙人である事は明白である。
賢明な読者諸氏は、ここでハテナと首を傾げたのではないだろうか。
高すぎる難病の治癒率。超常的な科学技術。爆破事故で重傷を負ったという記憶はあれど、意識を取り戻してみれば無傷で生還していたという我々の境遇と奇妙に一致する情報である。
「でも、霊安室のくだりって、完全に『病院の七不思議』ですよね」と神田青年が揶揄するように言う。
「そうなんです！」
この男は自説の非を認めるのになぜこうも元気なのだろうか。
「実は、霊安室を調べようと思っていまして……ただ、ここの人たちにはもう随分と警戒されてしまっていて、入れてくれそうにないんですよ……」
要するに、我々に声を掛けたのは霊安室に入ることのできる手引き

が欲しかったということらしい。
　真矢青年の懇願に顔を見合わせることしばしの我々である。時間があるかと問われれば有る。かと言って積極的に手伝う動機もないが……
「暇潰し程度には付き合ってやるか」とやる気はないながらも神田青年は肯定の意を示した。
「みんなが行くなら私も」と山田嬢は静観の構え。
　対する私であるが、押し出しの強い狂人には強く逆らわないのが身上である。
　かくして、さながら『ワタリクリニック潜入特派員』となった我々は、院内の小冒険と洒落込むのであった。

病院にて③

霊安室は1階にあり、遺体を運び出すよう駐車場と繋がっている。
我々の第一任務は、駐車場へと繋がる扉の鍵を開け、外に待機している真矢記者を招き入れることである。
まずは神田青年と山田嬢が霊安室の様子をそっと窺い、中に誰もいないと分かった所で神田を見張りとしてドアの外に残し、私と山田嬢が足音を忍ばせて侵入した。
中はこれと言って変哲のない霊安室である。一見して異常な個所は見当たらなかった。
向かって左側の壁には遺体安置室が3つ並び、向かって右側の安置室には『橘ゆずか』とネームプレートが掲げられていた。ネームプレートがあるのはその1つだけ、他の安置室は空なのだろう。部屋の反対側には祭壇があり、橘嬢の遺影と、ロウソクの灯った燭台が配置されている、簡素な部屋である。
遺影の中で笑う少女の顔が、私の胸中を静かに波立たせた。
思わず写真を手に取ろうとしたその時、うっかり手をロウソクの炎にかざしてしまった。
指先を襲う痛みに声にならない悲鳴を上げ、慌てて手を引っ込めた私であるが、不思議なことに火傷の痕は何処にもない。
「どうかしましたか?」
「いや……何もないよ」
手を何度もひっくり返して凝視する私を訝しんだ山田嬢だったが、私は炎に触れたのは気のせいだと決めつけて、この出来事をそれきり記憶の片隅に追いやってしまった。
後に、それは大きな間違いであったと知ることになる。
外開きの扉の鍵を開けてやると、「どうですか?」と顔を期待に輝かせながら真矢記者が入ってきた。
「どうですかと言われても、ご覧の通り何の変哲もない霊安室ですよ」と答える私に一瞬落ち込む表情を見せるが、そんな事でめげる記者根性では無かった。

「じゃあ安置室の方、見てみましょう」
つかつかと安置室の方に歩み寄るや、何の躊躇いもなしにネームプレートの掲げてある金属質の扉をガチャリと開けてしまった。
「あんた、何やってるんですか!?」
さすがにやりすぎである。こんな非常識な人間の頼み事など聞くんじゃなかった……
後悔と橘嬢への罪悪感と共に真矢青年の肩を掴もうとした時、私は気付いた。
安置室の中には空のストレッチャーが鎮座しているのみ、遺体は何処にもない。
今一度扉のネームプレートを確認するが、間違いなくここには少女の遺体が安置されているはずだ。
固まる我々の様子を不審に思ったのか、山田嬢も恐々と中を覗き込む。
「ありませんね、遺体……」
「あれから丸1日以上経ってるみたいだし、ご家族が引き取りにいらしたのかもしれない」
「ちょっと待ってください。何か泣き声が聞こえませんか?」それに何だか生臭いような、と真矢青年。
泣き声などは聞こえない。山田嬢も首を傾げるばかりだが、ふと妙なことを呟いた。
「奥から風……が吹いてるように感じます」
「何してるんですか、皆さんで」
いつの間にか神田青年が入室していた。恐らく私の大声を聞き咎めたのだろう。
しかし、眉を顰めているのは別の原因らしい。
「何か、生臭くないですか、ここ?」
「まあ、霊安室なんて僕もあんまり入ったことはないけど、こんなものじゃないかな? 場所が場所だし」
「生臭いですか? 私はお線香の匂いしか……」
そうこうしている内に、真矢青年はストレッチャーを引き出して安

置室の中に潜り込んでいた。
「ちょっと、これ何だと思います？　センサーかな……？」
　ストレッチャーが収まるだけの空間しかない安置室は、当然の事ながら大人が立って入れるほどの高さはなく、屈むか膝をついて這い進むしかない。その足元で、何かを見つけたというのだ。
「スマホの明かりだけじゃ弱くて、よく見えないんですよ」
　ついに好奇心に負け、私は祭壇のロウソクを手に真矢青年の後に続いて行った。
　薄暗い安置室の足元をロウソクで照らしてみると、確かにストレッチャーのレールに沿うように、センサーらしき小さな機械が対になって設置されていた。
「ひのふの……奥の方も合わせて3対か。ストレッチャーが全部入ったことを感知するのかな？」
　問題は、感知して何が動作するかである。まさかセンサーライトでもないだろうが……
「あれ、この奥の壁、向こうは空洞みたいですよ。叩くと音が違う」
　いっぺん出ましょう、と真矢青年に促されて私は霊安室に戻った。とんとんと腰を叩く。
「これ、試してみませんか？」
　最早何を、とは訊くまでもない。我々は顔を見合わせたが、好奇心が良識に勝ったか、反対する者はいなかった。
　誰からともなくストレッチャーに手を掛け、安置室にゆっくりと押し込んでいく。
「まだです。奥のセンサーの所までだから、もうちょっと押してください……ストップ、その辺で」
　当初の位置より随分と奥までストレッチャーを押し込んだところで、左の方から音が聞こえた。何か重量のあるものが滑らかに動くような……
「真ん中の安置室ですね。行ってみましょう」
　今度は神田青年を先頭として、真矢青年、私、山田嬢の順番で真ん中の安置室へと入っていった。

「何で君みたいなでかいやつが先頭なんだ……前が見えないじゃないか」
「僕だって、中が気になるんですよ……あれ？」
頓狂な声を上げる神田青年を質すと、
「奥の壁がない……どこか、に続いているみたいです」
安置室の奥を抜けたその先は、確かに『どこか』に続いてはいた。
その場所で何が起きたのか、我が身で味わった経験として勿論私は知っているが、『そこ』が『どこ』であったのか、あらゆる意味で私は未だ知りえていない。
深く屈み込んだ私の前で、真矢青年が立ち上がった。奥の壁を抜けだのだ。
そこは今まで我々がいた空間、人の手による近代的な建築物とは明らかに一線を画していた。
スマホとロウソクの明かりに浮かび上がるのは、先ほどまでの無機質な病院の内装ではなく、前時代に掘られた洞穴のような無造作な岩肌である。
小部屋ほどの空間のその先には、これもまた造作の荒い下り階段が、その先へと我々を誘う様に闇口をぽっかりと開けている。その闇は我々の持つ幽けき光源をむしろ塗りつぶさんばかりに色濃く……
「下りですね、足元に気を付けていきましょう」
欠片も不安を感じさせない真矢青年の声に、頼もしさよりも苛立ちと呆れが沸き起こる。この男の心臓はどうなっているのだろうか。頭のネジが十本単位で外れているのか。
「待ってくださいよ。明らかにおかしいでしょう、ここ」
このまま進むんですか、と最早声に哀願を滲ませて問いかけるも蛙の面に小便、不良記者は何に遠慮することもなく、まるで見知った遊歩道を歩くかのように、粗雑な階段を降りていった。
どれだけ下っただろうか、先頭を行く足音に湿気を感じてから程なく、浅い水たまりを踏みゆく音が聞こえ、そして自らも水に足を踏み入れる感覚があった。
足元を照らすと、浅く広がった水が足元を揺蕩い、４人の歩みが水

面に作り出す複雑な波紋がてらてらと鈍く光を返してくる。
「緩いけど、流れがありますね……川かな」
「戻りましょうか」
　どこか呑気な神田青年の感想に、それをほぼ無視する形で突如として真矢青年が畳みかけた。
「どうしたの急に」
　面食らって問いただす私に、
「まあ、記事にするならもう十分ですもんね」と後ろの方から山田嬢の声がした。確かに、安置室の馬鹿げた仕掛けとこの空間、これだけで十分記事のネタにはなるであろう。
　『隠し通路を抜けるとそこにはアンデッドの実験場!?　とある医院に隠された政府転覆の陰謀！』という荒唐無稽な見出しが脳裏に踊った。
　しかし、返ってきたのは意外な反応である。
「まあ、記事にするだけなら、そうですね」
　身体ごとくるりと振り返り、真正面から見つめてくる。どこか醒めたような顔と声。
「でも、これだけでは証拠不十分です。僕は、本当の事が知りたい」
「本当の事って？」
「ドクター渡は何かを隠している。それは最早間違いのない事ですが、この地下空間はその一部に過ぎない。僕が知りたいのは、彼が隠そうとしている事、その全貌です」
　先ほどまでの軽薄な笑みはそこにはない。切れ長の双眸を貪欲に光らせて、真実への飢えを隠そうともしない。どうやら、この青年は私が思っていたよりもずっと切れ者のようだ。
「これだけの空間です。恐らく、どこかにこの場所に関する資料があると思います」
「秘密の資料、と言うと……院長室とか？」と神田青年。
　得たりとばかりに頷き、破顔する真矢青年。
「行きましょうか、院長室」

病院にて④

「鍵、掛かってますね……」
「まあ、当然だよなあ」
「山田さん、警察なんだから、ピッキングとか、できませんか……」
「できません！　ていうか駄目ですよこんなの現行犯タイホですよ！」
「ちょっと、大声出さないでくださいよう……あ、開きました」
やいのやいのと騒ぐ凸凹トリオに引き換え、真矢青年の何たる有能振りか。
それにしても、やけに手慣れた素振りである。昨今の雑誌記者に鍵開けは必須技能なのだろうか？
職業倫理に反するのか入室を渋る山田嬢を見張りとして残し、気持ち腰を屈め足音を忍ばせて入室すると、そこは政府転覆の陰謀が渦巻く秘密結社の司令室、という雰囲気の全くない、小ざっぱりとした事務室だった。
ドアを開けてすぐ目の前には、品の良い革張りのソファを備えた王室セットがあり、その向こうには木製のデスクとキャビネット、部屋の奥の一面を書籍の詰まった本棚が占めている。院長室と銘打つには少し手狭であるかもしれないが、調度品の一つ一つに気品が感じられた。部屋の整理や掃除も行き届いており、私物は殆どないようだ。
唯一私物と思われるのはデスクの上の写真立てぐらいのもので、
「奥さんと、娘さんの写真ですかね？」
早速デスクの向こうに回り込んだ真矢青年が覗き込んでいる。入り口近くで躊躇っていた私と神田青年もそれにつられるよう部屋の奥へと歩を進めた。
私も写真を覗ってみたが、そこに写っているのは若い女性と女児、場所はどこかの公園だろうか、二人は手を繋いで、揃ってカメラに向かい微笑みかけている。その表情からは穏やかな親愛が見て取れた。
「あんまり、ゆっくりはできませんよ。家探しをするなら、早いとこ済ませましょう」

仰る通りである。とはいえ、間取りは精々１０畳そこそこ、整理も行き届いた部屋である、探すべき場所はそう多くは無い。ひとまず私は机とキャビネットを、神田青年は本棚を探ることとした。
「……外国語、の本が多くて、よく分からないなあ。これ、ドイツ語っぽい……」
「僕もドイツ語は分からんね。こっちは日本語ばかりだけど、怪しい書類はないな。――おや」
「何かありましたか？」
「うん。書類じゃないけど、これは――鍵だな」
引き出しの奥の方に鈍く光るそれは、精々が３ｃｍほどの小さな金属製の鍵だった。現代に広く流通するシリンダー錠の鍵ではなく、所謂ウォード錠と呼ばれる前時代的な作りのものである。手に取りしげしげと眺める私に「アンティークの小物みたいですね」とどこか呑気な感想を神田が寄越した。
「どこの鍵でしょう。少なくとも院内の扉なんかではなさそうですが」
覗き込む真矢青年が評した通り、大きさといい形状といい、現代建築物に使用されている錠のものであるとは考え難い。
「まあ、こうして眺めていても結論は出ないだろうね。引き続きガサいれと行くか」
口ではそう言いながら、形として現れた家探しの成果に心は何処か浮ついていたように思う。
そんな私の背筋に、冷水が浴びせられたのはその直後である。
「おい――なんだこれ」
引き出しの奥深くに突っ込んだ私の手に当たる異物感。
その感触には覚えがある。手探りで輪郭をなぞり、引き出しを慎重に取り外し中を覗き込むとそこにあったのは……
「――押しボタンだ」
デスクの天板の裏側にあたるそこには、親指の爪ほどの大きさの押しボタンスイッチがあった。それも引き出しやその中身が引っかからないよう、わざわざ天板を座刳ってその凹部に埋設してある。

明らかに異常である。謎の地下空間しかり、ここまでして隠したいものが、この病院には確かに存在しているのだ。何より、このボタンを押したときに一体何が起こるのか――いや、まずはこのボタンがある事を皆に知らせなくてはならない。押すのは最後でもいい。私はそう思い、探索中の二人に声を掛けた。

「みんな、ちょっと来て。これを見てほしいんだけど――」

律儀に呼びかけに応じ室外から馳せ参じた山田嬢は、「スイッチですね。押すタイプの」と見たままの感想を漏らした。

真矢青年は、喜色満面の笑みで「押しましょう、ぽちっと！」と息巻いて、山田嬢に諌められた。

そして神田青年は――

「どうしたの、凄い顔色だけど」

真っ青になって指先を見つめ、ぶるぶる震えている。どうやらスイッチを見て恐怖を覚えたという訳でもなさそうだが――

「今、血が出たはずなのに……」

痛くない、痛かったのに、血が出た、とぶつぶつ呟きながら、要領を得ない言葉を発している。とてもではないがまともに会話のできる精神状態とは思えなかった。

ふと、神田の視線が注がれているのは指先だけではない事に気付いた。自身の指と、卓上を忙しなく視線が動いており、その小刻みな動きが一層パニックに陥っているような印象を周りに与えているのだ――パニックにあるのは間違いないのだろうが。

卓上を見てみると、写真立てから写真を取り出そうとしていたところだったのだろう、四隅を留めている飾りネジが外れ、表面を押さえていたガラス板が傾いでいた。神田はそのガラス部で手を切ったと言っているのだろうか？

「神田君、君は写真立てのガラスで指先を切った。痛みもあった。しかし傷も痛みもすぐ消えた――そう言いたいのか？」

勿論、私の脳裏にあったのは先程の霊安室である。熱を感じ、火傷を負ったと思われた、しかし無傷の指先。まさか気のせいだろうと思い、記憶の片隅に追いやった出来事、同じ現象が別の個人の身体で再

び起きたのだ。
　誰も目撃者のいない超常的な現象に、まさか理解が得られるとは思っていなかったのだろう、神田は驚きの表情で私を見つめ、それでも青い顔のまま大きく何度も頷いた。幾分かパニックも収まったと見える。
「そう、そうなんです。そこの、写真を出して、調べようとしてたんですが……ガラスの、縁で指を切ってしまって」
　血も出ていた筈なんです……拭ってしまって今はありませんが、と我々の目の前に指をかざすが、傷などどこにもあるようには見えない。そして、私以外の二人が隠そうともしない怪訝な表情は、かえって神田の精神をかき乱したようだ。
「本当です。こうやって……」
「ちょっと、何やってんですか神田さん！」
　ガラスの鋭利な縁を握って振りかぶった神田の腕に山田嬢が咄嗟にしがみつくものの、大男が振るう腕の慣性を殺しきれる筈もなく……
「痛……！」
　山田嬢の悲鳴に我に返る神田。斬り付けられた掌を引きはがす様に飛び退った山田嬢。
　そして呆然と立ち竦んでいた私と真矢青年の目の前で、確かにそれは起きた。
　すっぱりと刻まれた肌と内側から覗く肉質、すぐさま溢れてくる赤い血……しかし、溢れたかと思うと不自然なほど急に止まる。
「あれ、痛くない……？　血、止まりましたね……？」
　最も驚いたのは他ならぬ山田嬢だろう。溢れ出た血液を拭うと、そこにあるはずの傷跡はどこにもなかった。
　山田怪我しましたよね？　と呟きながら傷の出来たはずの掌を何度も擦るが、そこには流血の痕が掠れるのみ、ガラスで切り裂かれたはずの痕は何処にも見出せない。
「え……山田さん、も……？」
「僕もだよ。さっき、霊安室のロウソクで火傷したはずだったんだが

……」

この病院で治療を受けた我々３人の身体に発現した超常的な回復力、真矢青年の語る陰謀、そして霊安室から繋がる地下室に院長室のこの仕掛け。

事ここに至って、察するところが何もないほど私は暗愚ではないつもりだ。

間違いなく、この病院には何かがある。そしてその何かは、現代社会や我々培ってきた常識とは一線を画する『何か』だ。

「やはり、僕の考えに間違いは無かったようですね」と、事の成り行きに真矢青年は興奮を抑えきれない様子。

「さあ、探索を続けましょう。真実を、明らかにしなければ」

病院にて⑤

「そう言えば神田君、この写真はまだ見てないんだよね？」
「あ、はい。見る前に、手を切っちゃったから……」
　それは写真立てから外された一葉の写真。探索に心逸るあまりかえって見逃していた被写体を、改めて眺めてみた。
　そこに写っていたのは２人。年若い女性と、童女である。場所はどこかの公園の遊歩道だろうか。手を繋ぎ、陽光に目を細めながらも、揃ってカメラに笑みを向けている。二人の表情から読み取れる深い愛情と信頼、童女の顔形に現れる女性の面影。きっと、渡医師の妻子の写真なのだろう。写真を手に取り裏返してみると、そこにはこう記してあった。
『２００７０５１４　さやか７歳の誕生日　さやか、裕子と』
　左端の数字は年月日と思われた。もう１０年以上前の写真という事になる。
　ふと、胸が感傷に痛んだ。それはきっと、橘嬢との出会い、そして別れが想起させられたからだったろう。彼女と出会ったのも、こんな良く晴れた日の公園で、そして彼女もこんな笑顔を見せてくれた。
「ちょっと、こんなもの見つけたんですけど」と上ずった声で割り込んできたのは、真矢青年である。
　その手に抱えていたのは、本棚から引っ張り出してきたと思しき一冊の本だった。
「何というか、ちょっと普通じゃなくて……」
「うわ、なんすかこれ怪し過ぎでしょ。めっちゃ古い、てかボロいし」
「羊皮紙、でしょうか……随分年代物ですけど……」
　３人の評する通り、現代的な病院の院長室には余りに似つかわしくない一冊だった。羊の皮と思しき皮革で装丁されたその本にはどこにも表題が記されておらず、あまつさえ表紙と背表紙が小さな錠前で繋がれており、そのままでは開きそうもない。
「古びてますし、無理やり千切れますかね？」
「さすがに、それは後でバレますよ……」

「器物損壊は犯罪です」
「待って待って。さっき、引き出しで鍵を見つけたんだよ。これ、合わないかな？」
本の前小口に収まるように取り付けられた錠前は、一見して簡素なウォード錠と見て取れる。それに素材、古さ、大きさとそれぞれ特徴は一致している。
内部機構の劣化を警戒し慎重に鍵を差し込んでみると、見た目の古さとは裏腹に、何の抵抗もなく鍵は回った。
「ビンゴですね！　中身は……英語か。何とか意味はとれそうです。ただ、この辺の書き込みはドイツ語かな……ドイツ語はちょっと……」
「あ、ドイツ語なら、少し読めますよ」
しばし時間を掛け、二人によって明らかにされた内容は、驚くべきものだった。
＊＊＊＊＊＊
精霊の召喚に成功すれば精霊の体液で再生薬が作れる。体の部位を再生できるのであれば、今まで不治とされた多くの患者を外科手術により救うことができる。精霊の組織を直接移植すればさらに大きな効果も期待できるかもしれない。しかし、直接移植は再生薬の塗布よりも精霊の魔力の影響が大きいことが予測される。被験者の精神に悪夢以外の影響があるかもしれない。何より精霊から魔力の供給が断たれれば再生した部位は保てず、精霊の魔力なしには生きられないかもしれない。実際に試すより他にその影響を知る方法はない……
魔力■■■精霊について■■■顔■■■精霊はその魔力により無限の回復力を持ち、その組織は傷ついても再生する。精霊の力を借りれば多くのアーティファクトを創造したり、神の力の一端に触れることができる。この■■■■■■を呼び出し使役するには、自ら進んで犠牲となる人間を精霊に生まれ変わらせる儀式が必要である。儀式の内容は……
＊＊＊＊＊＊

「これって、つまり……」
山田嬢の身震いが止まらない。
その気持ちは私にもよく分かった。経年によるものか実験の詳細は資料の劣化により読み取ることは出来なかったが、ここに書かれている『被験者』とは私たちの事に他ならないのだ。『体の部位を再生』『悪夢』という単語もそれを裏付けている。最早偶然の一致として片づけることは出来ない。
「となると、アンデッドとはまた違う訳か……」
真矢青年がどこかピントの外れた所感を述べた。
「それにしても、『犠牲となる人間を精霊に生まれ変わらせる』というのが何とも穏やかではないですね」
その点は、私も気になっていた。この超常的な現象――手記によれば『再生薬の効果』は、精霊に生まれ変わったという『誰か』の犠牲の上に成り立っているのだ。
そして私にはもう一つ、気になる点があった。
「ここに書かれてる『悪夢』、二人とも何も言わないって事は、心当たりがあるんだよね？」
2人が、力なく頷いた。私の問いに俯き加減に視線を彷徨わせ、目を合わせようともしない。
「僕は、大きな芋虫が、僕の両脚を食べる夢を見た……いや、その前に……両足の前に、芋虫はゆずかさんを食べていた……」
自分が見た悪夢の話を他人に聞かせるなど、いつ以来の事だったろう。
「やめてください。それは……ただの夢です」
「……神田君も、同じ夢を見たのか。山田さんも」
重く立ち込める沈黙が、私の問いかけを肯定した。
気まずさを追い払う様に咳払いをしてから、真矢青年が水を向けた。
「ボタン、押してみましょうか」
滑らかに、部屋奥の本棚が動いた。入り口正面の壁一面を埋めていた棚の左から三分の一がほどが、音もなく奥に引っ込んでいく。

丁度本棚の奥行分だけ後退った後、今度は右方向にスライドし、その後ろに隠された空間が口を開けた。
さほどの広さはない。開いた間口は人の肩幅に少し余る程度で、奥行はそれよりも狭い。
隠し部屋は右の方に続いており、右側の本棚の裏に当たる空間には、まだ何か隠された物があると見えた。
「嘘でしょう……ここ、エレベーターがあります」
恐る恐る首を突っ込んだ真矢青年が、呆れたような声を上げた。
真矢青年に続いて隠し通路に身を乗り入れてみると、そこはどん詰まりの空間であった。床から壁、天井に続く一本のスリットは、確かにエレベーターを思わせた。とは言え、一般的なエレベーターと比べると随分小振りな印象を受けた。確かに、これを使用する人数からしても、隠された空間に設置するという意図からしても、狭くて当然なのだろう。
「詰めれば、何とか４人は乗れそうだね。重量超過のブザーなんて鳴らないんだろうけど」
「ワイヤー……切れたり、しませんよね？」
「それにしても、よく一目でこれがエレベーターだって分かりましたね」
山田嬢の問い掛けに、真矢青年は黙って両の手に持ったものを差し出した。
右手には電子辞書ほどの大きさの機械部品らしきもの、そして左手には、手書きの字が連なる紙束を持っていた。
「落ちてたんです。通路の先に、重ねられて」
電子辞書と私は評したが、大きさだけでなく見た目もそれは電子辞書に似ていた。
一般的なｑｗｅｒｔｙ配列のキーパッドが目を引くが、電子辞書と大きく異なるのは液晶画面が付いていないことである。その代わり、画面に相当する箇所にやや大ぶりなボタンが二つ付いており、ボタンにはそれぞれ『△』『▽』と記されている。
これらのボタンを見れば、確かにこの空間とエレベーターを連想と

して結びつけるのは容易いであろう。
「でも、このキーパッドは何ですかね？　暗号を入力しなきゃ動かないとか？」
「分からないな。取りあえずこっちのメモみたいなやつを読んでみようか」
ちょっと長いけど読み上げるよ、と断りを入れてから、私はメモを読んでいった。
しかし、驚くべきその内容を読み上げるうち、我知らず口調は熱を帯び、ついで戸惑いを孕み、やがて宙へと消えんばかりに窄んでいった。

病院にて⑥

以下が、メモの全文である。

＊＊＊＊＊＊＊

また患者が死んだ。

さやかが死んで以来、一人でも多くの患者を救おうと努力してきたが現代医学の限界を感じている。私は自分の患者の命を一人残らず救いたい。そのために悪魔に心を打っても構わない。文献で見つけた不死身の精霊の力が手に入れば……しかし、そのためにはわたしの目的に賛同し、自ら生贄となるものが必要となる……

裕子が、

（※このレポート用紙は以降破れていて読めない）

（以降１０数枚に渡りレポート用紙に意味不明の文字が書きなぐられていて判読不能である）

犠牲を無題にしないことだけが私にできる唯一の事だ。

起きてしまったことを受け入れ、一つでも多くの命を救うことを考えることにしよう。

精霊の回復力は素晴らしい。あの精霊の無限の回復力を人間に使えれば、どんな怪我だろうと、そうたとえ手足を失っても治せるはずだ。

成功だ！　魔術的な手法を使い精霊の体液と被験者の体組織を攪拌し生成した溶液を塗布すれば、どの部位であっても欠損した組織が再生することがわかった。精霊の力の届く範囲であれば、少しくらいの怪我は瞬時に回復するようだ。

なんということだ。私のミスで患者を殺してしまった。どうやら大きな器官になると溶液の塗布では再生が追いつかないようだ。精

霊の組織を直接移植すれば、もっと大きな組織も再生できるかもしれないが、精霊の影響も大きくなる。危険性は溶液の塗布とは比べものにならない。

四肢を失った患者が運ばれてきた。放っておけば全員が死ぬ運命だ。危険性はあるが、精霊の組織の移植を試すべきだろう。あの少女はもはや精霊と一体となる他に生きる道はないが、他の患者達の命は助けることができる。

実験は成功した。
そう、私のしたことは人体実験に他ならない。
彼らは私の選択をどう思うだろう。
いずれ全てを話さなければなるまい。
彼らの人生は彼ら自身に選択権があるのだ。

○被験者ファイル
探索者とゆずかの身体的特徴および爆発時のケガの様子が書かれていて、次のファイルにそれぞれのケガ（四肢欠損状態）の写真が貼られている。

★精霊の創造
（院長室にあった本の欠損部）
この魔力とたくさんの顔を持つ精霊は、自ら進んで最初の犠牲になろうという人間が必要である。
―以下に儀式の詳細な手順が書かれている。この儀式によって生み出された精霊を育てるには、生きた人間を生贄としてささげる必要がある。さらに魔力を保つためには定期的に人間を捧げなければならない。

命を救うために他の命を犠牲にする。その罪は私が背負う他はない。それでも一人でも多くの命を救っていくことが私の使命だ。し

かし万一の為にすべてを無に帰す用意だけはしておこう。あの地下室に地下水を入れればすべては終わる。
Ｐｓｗｄ―＞Ｓ，ｓＢＤ
胸が悪かった。
吐きそうだった。
このメモ群、鍵の掛かった書物に書かれていた走り書き、隠された地下空間、辻褄の合わない記憶、それらすべてが繋がった。
この病院にまつわる謎は、もう存在しない。
我々の目の前にすべての答えは投げ出されている。
しかし、それは我々が暴いたのではない。
手がかりも、答えも、探せばすぐそこにあった。
我々の手の届く範囲の、そのすぐ外側にそっと置かれていたのだ。
そしてそれは間違いなく、渡医師自身の手によるもの。
間違いない。渡医師は裁かれたがっている。
自身の行為が信念に沿った正当なものであると確信する一方で、良否の判断を別の誰かに委ねているのだ。
沈黙が澱のように淀んだ。
誰もが真実に辿り着き、しかしその先にある答えを口にすることが出来なかった。
それは当然だったろう。
渡医師が秘密裏に行っている儀式めいた行為は、誰かを救いたいという至極真っ当な動機を礎とし、少数の犠牲を止む無しとしながら、失われるはずだった多数の命を繋ぎ止めてきた。他ならぬ我々もその恩恵に与かっている。
一体誰が、どのような権利をもって渡医師を裁くというのか？
彼の行いを認める資格が、もしくは断罪する権利が誰にあるのか？
呪いのような問いかけを自身の足跡に実にあっけらかんと残し、恐らく渡医師はこの先の地下空間で待ち受けている。
そして裁きの沙汰を問いかけるのだ。
胸を苛む吐き気は、しばらく治まらなかった。
「行きましょう」と口火を切って促したのは、意外なことに神田だっ

た。
私を含めた3人は、それぞれもの問いたげな表情で彼の方を覗った。
いや、今から振り返れば、それは意外でも何でもない。
我々の中で橘嬢を最も慕い、その遺失を最も嘆き、そして犯人への怒りを最も露わにしたのが彼その人であることは誰の目にも明らかであろう。加えて、彼の持つ淡い恋心すらも。
だから、誰ももう何も言わなかった。
私は、黙ってボタンを押した。
音もなく動き出したエレベータは程なくして緩やかに減速して止まり、再び扉は開かれた。
扉の向こうは、果たして予期していた通りの空間であった。赤茶けた剥き出しの岩肌が上下左右を埋め尽くす、霊安室を抜けた先で見たものと同様の通路である。簡素ながら人口的な電気照明が、配線も露わに壁面を等間隔に照らしている。
エレベータから降りたすぐ先は小振りなホールともいうべき空間になっていた。そのまま正面に進むと壁面は窄まり、真っすぐ奥側へ通路が続く形になっているが、１０ｍ程向こうで左に折れており、ホールからその先を見通すことは出来ない。
端的にオチから言えば、その曲がり角のすぐ向こうに、我々の探す人物はいた。
勿論、渡医師である。
また、同時に彼の使役する妖精の姿もそこにあった。

???にて②

正直に告白しよう。

手記の中に記されていた「妖精」という言葉に、私は少なからず予断を抱いていた。それは例えばネバーランドのティンカーベルであり、エルフ国のレゴラスであり、つまるところ意思疎通の出来る人間の亜種である。その辺りが私の想像力の限界だったということであろう。

だが、これは、こいつは違った。

あの夢が正夢に近い何かだったという予感をもっとある種の覚悟として自分の中に持っておくべきだったと、今この手記を書きながら自身の不明を恥じるばかりである。

そう、かの『妖精』とは、読者諸兄が想像している如く、総身を毒々しい紫色で覆った巨大な芋虫であった。夢の中に出てきた様に、体中に斑点のように点在する人の顔。それぞれが別個の人物の顔のように見えたが、みな一様に苦痛を訴えるかのように情を歪ませている。そして夢に出てきたそれよりもなお悍ましいのは、人の顔だけでなく、腕や脚がそれぞれ好き勝手な方向に生えているのだ。

苦しみに喘ぐ顔また顔、そして好き勝手な方向に蠢く手足、そしてそれらの根付く本体たる芋虫……

私の惰弱な精神は、かの『妖精』を直視することを躊躇いもなく放棄した。

有体に言えば失神であり、私のその後の記憶は、全てが終わってからエレベータに駆け込むまで途切れている。

山田嬢に当時の様子を伺うに、「なんか『うご』と『あが』の中間みたいな声を出したっきり棒立ちになってましたよ。視線？　……まあ、虚ろでしたね。あとヨダレ垂れてました」とのことである。

（正確に記せば、その間私の精神は完全に幻覚・幻想の世界に逃避していた。それが具体的にどういったものであるか当手記では省くが……まあ、脂ぎった中年男に相応しい低俗なそれであったと記すに止めたい）

かの妖精、そして陰謀の黒幕たる渡医師を目前にし、語られた経緯やその先の結末を、だから私は見届けることは出来ていない。
読者諸兄におかれては、私がこれからここに記すことは、すべて神田青年や山田嬢の記憶に基づく出来事であり、いわゆる『事後』の成り行きである事をご承知おき願いたい。
そこはごく浅い水溜り。
地下水脈の緩やかな流れがほんのひと時留まるだけの水辺は澱むことなく、空間の広さに比して頼りない照明の元でも、清らかさを見て取ることが出来た。
その真ん中に、渡医師はいた。白衣の脇に両の手を垂らして、我々が来るのを待ち受けていたかのように相対し、その姿勢にも視線にもまるで揺るぎは見られない。
そして、その後ろに控えるのは、かの妖精。
我々が探る謎、その核とも言うべき存在である。そして同時に……
「ゆずかさん……橘さんも、その中にいるのか?」
声音に深い怒りを滲ませ、神田青年が単刀直入に詰問した。
「ええ、そうです」
対比するように、渡医師の応えはどこまでも穏やかである。
『その中』とは即ち傍らに控える巨大な芋虫、そこから生える手足や顔面に他ならない。幸いと言って良いのか分からないが、少なくとも我々から見える中に、橘嬢のそれと思わしき顔は無かった。……いや、間違いなくそれは不幸中の幸いというべきだったろう。我々の誰一人として、彼女の苦悶の表情を見たいとは思っていなかったのだから。
もう一点、ここで特筆すべき事項がある。それは渡医師が神田青年の問い掛けに即答したという点だ。それはつまり超常的な現象や巨大な妖精について、また橘嬢の迎えた末路について我々が知っているという事を、彼も知っていたという事になる。
それが意識的ものか否かは分からないが、少なくとも渡医師の態度は秘密をひた隠しにする人間がとるそれではない。その証拠に、素人丸出しの我々でさえここに辿り着くことが出来た。

『裁かれたがっている』。私がこみ上げる不快感と共に抱いた直感は、やはり間違ってはいなかった。
「彼女を犠牲にして、それで満足か？」
「はい。貴方がたを助けることが出来ましたから。それに、他の人も」
他人を裁くという行為に言いようのない忌避感を覚えるのは、自分にその資格があるのかという問いが何処までもついて回るからだ。
しかし彼を、神田青年を動かす激情は、その問いを凌駕するほどに激しかった。
それが何かの免罪符になると思ってはいない。ただ、神田青年の決意の深さと導き出された決断を、私は尊重したいと思う。
「あの子に、選択肢はなかった」
それだけを言って、神田青年は手元のキーパッドを操作した。
『万が一の時に全てを無に帰す』。
『地下室に水を』。
『全てが終わる』。
なおも悠然と佇む渡医師とは対照的に、真矢青年と山田嬢は泡を喰った。
当然であろう。メモ書きが正しければ、それは高層ビルの爆破スイッチを当のビル内で押すのと同じ行為だ。
「ちょっと、いきなりすぎやしませんか!?」
「菅沼さん起きて！　ああもう！」
このような状況下でも、彼女の瞬発的な行動力は如何なく発揮された。なおも木偶のように立ち竦む私を殆ど抱えるようにして、エレベータへの道のりを駆け戻った。
山田嬢と私、真矢青年が乗り込み、最後に神田青年が息せききって扉をくぐるや山田嬢がキーパッドをもぎ取った。
叩き付けるようにボタンを押し、僅かに上昇のGを感じた所から、ようやく私の精神は現実へと帰還した。
「あ……夢か……幸せだった……」
「何言ってるんですか……もう全部終わりましたよ」
息も絶え絶えな真矢青年の言葉にきょとんとする私、当然、状況は

全く掴めていない。
ただ、そう長い時間気を失っていた訳でもなく、エレベータが停止して院長室に戻る頃には、大まかな流れは知ることが出来た。
「そうか、神田君が、ボタンを押したんだな」
「すみません。何の相談も、せずに……ただ、僕は渡さんを、許せなくて……」
出会った最初の時のような、どもりがちな喋り方で不器用に謝る神田青年を、慰めこそすれ誰も責めることはなかった。
ただ、一点気になる事があった。
山田嬢も、同じ事を疑問に思ったようだ。
「そう言えば、『地下室に水を落とす』んですよね？　流石に何か、音とか振動とかがあっても良さそうですけど……何も聞こえませんよね……？」
「そうなんだよ。ねえ神田君。キーパッドで何て打ったの？」
「え……Ｓ，ｓＢＤって、メモの通りに、打ちましたけど……」
私は小さくため息をついて、キーパッドを手に取った。
「そこは、こう打つんだよ」
２００７０５１４。それは、この部屋にあった写真の裏に書かれていた数字。
『さやか７歳の誕生日　さやか、裕子と』。
渡医師がこの精霊を使役する意思を固める切っ掛けとなった出来事がこの日に起きたのか、今となっては分からない。
一人の男は裁かれたいと願い、また別の男はその人を断罪したいと思った。
私が何かの意志を示した訳ではない。
それは、自分の手を汚したくないという意味ではない。自分はしょせん傍観者に過ぎなかったのかもしれないという、諦めの境地にむしろ近い。ただ、彼の思いに寄り添いたいという気持ちが、素直に彼の背を押す手助けをした。
足元に静かな、しかし確かな振動を感じた。
きっと、悠然としたあの姿勢のまま、彼は自らの仕掛けに呑まれて

いったのだろう。恐らくは、彼の意図したとおりに。
私は今に至るまで、彼ほど自らの死を何の外連味もなく受け入れた人物を知らない。
「痛っ……」
何気なく写真立てを持ち上げた手に、鋭い痛みが走った。
小さなガラスの破片が裂いたのだろう、指先には薄く血が滲んでいた。
それは、この物語の終焉を示唆していた。
精霊は最早、いなくなったのだ。そして、我々の最も新しい友人も。

〈了〉